

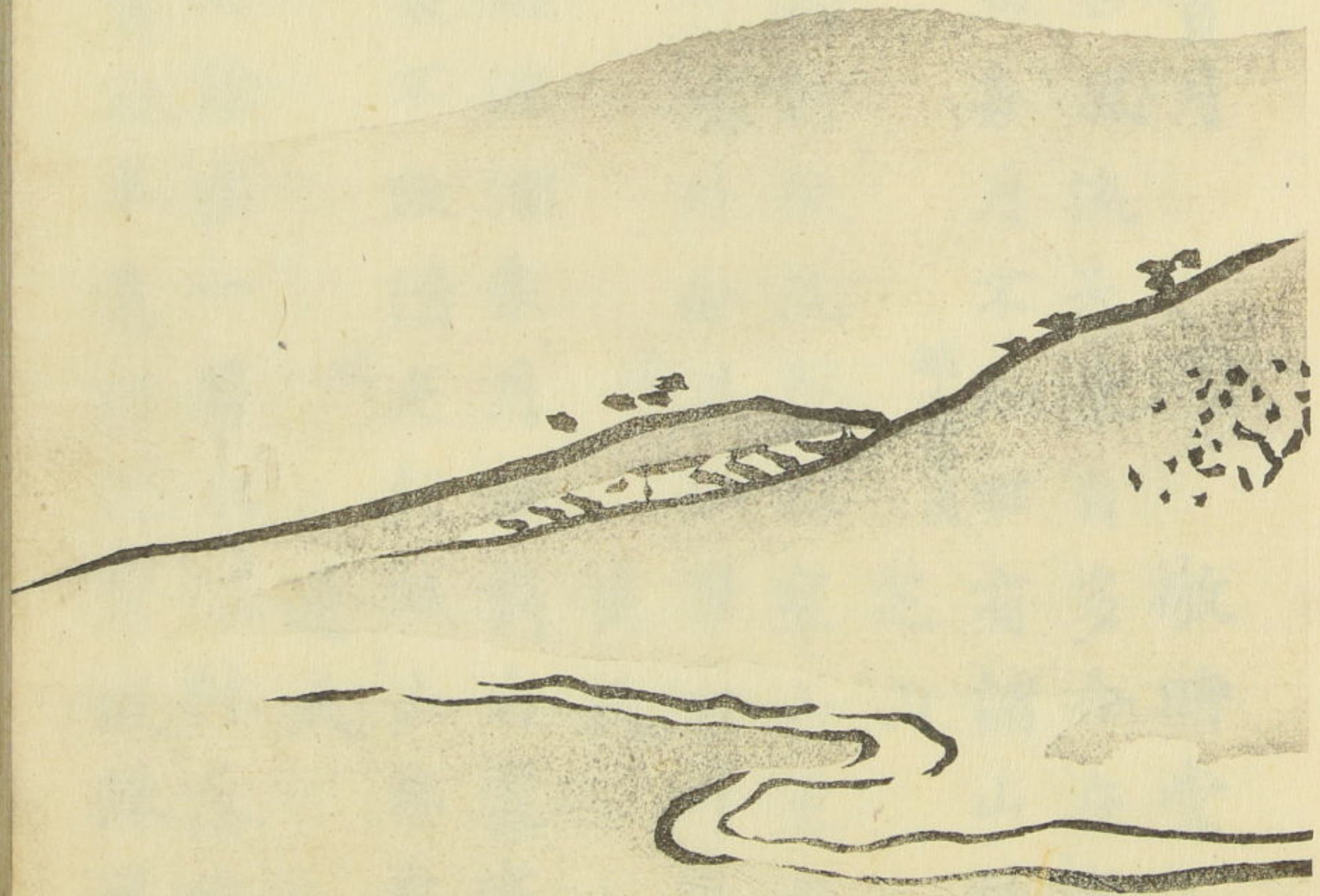


^ 5  
6649



稼場之山一自滬為之出而四方同  
 好之人法之來遊者惟秋月去風和日  
 昇送於山之鶴海於樹橋之下而以此山  
 允日月也其月之極一季盛一季乃松  
 壽之如之其子色以香安信是滬之南之  
 功之山靈也其嘉之可謂高者其居此山之  
 也也之可謂其法之集之秋之結聚持其  
 求序其樂其軒之將先生序於其初編  
 其之其卷其矣又其之其為其德之切特云  
 其後之其子以為之弘

古鶴集書



遊舉  
信四



糠塚賞月

江戸

敬時堂

始看此地占風流天幸自多今夜遊  
昔日唯吟田每月不知世有諸山秋

越後長岡

芝山

華燈幾點掛新秋沈磬寂寒山更幽  
千里清光千嶂外金波如帶女川流

同

良民

松聲遠近起波瀾乘月班荆白露寒  
流水連山長不改清光何減去年看

同

逸民

天高月皓片陰空一帶水煙林落東  
鄰里寥々宵既半遠村沈磬渡疎風

肥後

西坡

千萬戶燈秋冷淡一衣帶水影紛披  
消磨多少城中味真箇閑人看月時

紀伊

謙齋

時平明主數傾杯庶矣蒼生方富哉  
玉兔開春獺塚月稻畦十里影徘徊

房州

菱灣

秋滿諸山酒滿盞坐吞清影正吟哦  
醉來飽賞十分月始識風流倍更科

江戶

靜軒

天到三更夜氣濃瀑泉何處響千峯  
月隱前崖路深黑餘光猶照澗西松

三

小諸

靜壽堂

風清雲霽四望開新樣秋光興自催  
溪綠山明何皎潔亭々月上碧霄來

清涼亭

素秋雪樣諸山月遊賞年々依舊長  
共占風流詩瘦客一宵亦愛遣身涼

軒々軒

山淨意謂立水邊日沈素月流青天  
草頭風過逝波似樹間有聲如濕々  
四望皎然氣亦顯諸山月色一何好  
有歌有舞余微醺衆興吟成一詩草  
同又賦

斯夜斯山斯月子清光清景詎容辭  
一年々遠播名勝多少遊人多少詩

耕雲樓

淺嶽之南糠冢山地幽勝景異人間  
孟秋既望相携上賞月雞鳴猶未還

思齋堂

一味涼風夜色清草蟲唧唧報秋聲  
滿輪皎月如明鏡閑立山頭無限情

岨水

風光遠隔世塵裏每到愛看此地幽  
珍重中元糠塚月幾人忘却更科秋

亭々亭

雨霽新涼至宜當賞月遊草頭自玉  
澗林外更清幽山帶秋光潔水浮素  
影流特登糠塚望月色賽中秋

勉翠樓

清溪一曲隔塵寰佳境杳然糠塚山  
憐見松間明月色年々歲々醉開顏

愛日軒

三更涼夢到家鄉賸看諸山初秋月  
今夜風月太清生一天雲閣佳興發

梅坡

暮雲收盡動秋聲草虫啾啾自有情  
乘月相携詩賦友賞心無厭到天明

山城

山帶松風清韻響雨餘秋色送新涼  
今宵幸遇十分霽月影鮮於滿野霜

麓岳

雨餘秋色長空綠疑是看々水著天  
洗出明光一顆玉十分夜景在山巔

玉泉堂

一刻千金糠塚景輕風淡月碧烟濃  
忘歸醉賞古松下遙聽前村夜半鐘

九經堂

風入松林濤欲湧月浮天灑淨漪山  
眺望不厭宵將半糠塚峯頭無客還

七月十六夜登糠塚賞月と

以ふこゆを

越長里

葡萄園

諸人のもろ山笠人よ影まろく  
志せしゆさちまふ又月のほさ

初秋月

信池田

顯等

秋風のうらみはししく暮のまは  
吹く人しそまき今宵まむ月

日

畝丘

月々お見る月あつる今宵この  
音ねよ名門る初秋の月

日ヌク井

瑞枝

まの類利見はきまゆのそ乙女川  
岩のまは露まにほの月影

雲も霧もふもふもけき月も多々  
人や同様にやまの跡下葎

信長沼

一 義

糖塚山月

上もあさきるの月のまろけ米  
まろけ米も多々あさき糖塚

鳥庵杜住

さるるあさきるの月のまろけ米  
月あさきるの月のまろけ米

千早振主

さるるあさきるの月のまろけ米  
さるるあさきるの月のまろけ米

小諸藩中  
継成

白くあさきるの月のまろけ米  
さるるあさきるの月のまろけ米

日野  
百株

虚ろあさきるの月のまろけ米  
山のまろけ米をさるるあさきる

駒人

まろけ米と月のまろけ米  
まろけ米と月のまろけ米

岩村田  
其橋

あさきるの月のまろけ米  
あさきるの月のまろけ米

町外  
好成

鎌倉あさきるの月のまろけ米  
さくあさきるの月のまろけ米

塩名田  
南山亭壽

川あさきるの月のまろけ米  
志先あさきるの月のまろけ米

榑井  
阿奈人

あさきるの月のまろけ米  
あさきるの月のまろけ米

小原  
滝近



盃の軟水初りさわけき送りさ

花の通ふ糖塚の月

咲いた家花のこころくまりあ

あはれあまき屋戸櫛

山の楊子月毛の弱のえもあて

西へ美ると見えしうら盆

鳴を授け家世表す信庭より

花のうけ入る月の軟さ

中をい風もあつてふさお

とあま水清き糖塚の月

とく山西もあも咲きあ

花のうらふ方角も

信小原

滝 近

音 清

枝 成

耳取 木 敷

平賀 雁法師

塩ノ 柑 子

赤岩

水 面

蟻塚の白挽おを糖塚

のせの燈火盃は初月の

村を吹そくめてハ尺八の

こころは月も喜も澄み

乙女川波の歌もうら糖

婿様との名や負せらん

野も山も真白く見えは初人の

月の雪もみ跡はうてよし

今宵も歌の筈を志さる

とらぬる月を顔みえ

秋もあけ今宵も家をむき

す終つて月の歌角力

春日新甲

真歌記

中居

俊 正

比田井

藍 丸

房 得

于 雄

式ア

月小のふとふををたむけの草よまき  
さつりともまきさる風吹くやせん

信天神林

真水

ぬる塚の山をたつら見あはるるこ  
うらうぬ人もあきささるるをれ

保鳥

七月既望糖塚山中

夢の月よ霧を置り月一夜

信下縣

桃

糖塚も月と家月の一ツ

弦武

名月や雲をふ人のありうき

岩尾

鶯父

あまじしくあまあはし雨の月

文席

晴まると墨をぬふと只月の友

塩

月里

世をふゆよせし人斗較守の月

水園

野も山も月一

一山

おちくおち糖塚を血結月

南中

東をとりありし月月の白き子

浅令

風の月落も思はるるらん

氏與

そ日の月名の宣ぬ事し多利

故園

すま波らさるる流も花の影

信今里

水

松小を家もるも友を月を育

九井サハ

齋

丘月見を志す川瀬の成るま

寒

来

散櫻さるるの庭をさむ山路

石

明

晴川赤岩の晴波秋半の月

馬瀬口

富

表や明く志をさく沙芸櫻や

一ツ谷

桂

雲

猿を曲く連もに茶の下宿

岩村田

斗

紅

月ありて家育く山の留ま

細カケ

月

桂

目つる山ハ遠く又とあるあり

米

人

月更く移るの管さる山の家

春

朗

茶の山麓来あくも雲 庵

化

桂

名月や今宵の宿も明をさ

羽尾

鳥

度

此松又庵引さる秋の月

雀

尾

栗柿も算てまをやは月表

上平

應

春

心と夜も詠くえをやるの月

五

洞

山寺も見え川この色つ花の雪

露

逕

花の本結はまやうあれ白ひや 信上平 貞 雅

名月や若きとあはれ象の来 菓 菊

世の華ふたふたきくきくきく 川原 一 白

墨と人の噂やき移結 月 柳 圃

糖塚の山と花月甘の鏡あき 百 河

藤葉おも忘るぬ山や花の声 甘 雨紅女

足もりの軽くきけ入をふ見式 積 雅

月影のほかりとある山楊井路式 亀 足

十

多津在れ春風修さるあや 白田 皂 齋

松風のきふ更り 盆 結 月 吟 平塚 齋

盆結東乃月ハ流以るあ川 嘯 齋

魚はしらのあて月照一結式 真 積 翠

子の為ふ送りゆ替もああ 逢 春

十六あやゆきの山の噂せん 一 窗

名木の落葉も雅あはれ松の中 祭

秋中より晴るも月の一輪式 苗 易 足

菱花のある不日暮る山路信上田半山

るの月つこの秋はあつらひ鷹山

白と秋小日の暮る跡る山路嘉新早茂竹

飛と子の心掛ふや落し水谷水更谷荏

無ふ日の重み果を花の雪文雪

二さあく咲々仕落ぬ花一本林霞

降程のささもふ秋あり月のる桐居

名月の光ありささく照ふり五調

土

ささく小秋の中も月朝水芹翠

やの山を是ても秋あり山傍李尺

名月や居並ふ星を落南生

家影をいり見く更る月秋水松醉

月の星照ふ入果や秋の山百丈

来の乃の風を隈るれ月秋水冬扇

侍看やうけ合ふさ聖の守尺鳥

雨さつと降とあさあり葉の月宋鶴

長沼

飯山

十日寺

椿水更

初波や芦の葉も春月の朝

信長沼

花眠

月と中もなごもるや池の鴨

子垧

子家室や若多伸家日川のひる

春甫

白程の年ややいそん山さそり

雨石

十六夜の月の嵐の舟の櫓の声の長

有

そよあそは海翼のあひ歌月の唇

竹摩

そんこやのやれとてかこく草の月

武白

月のやをよも聖の志てそん

八朗

十二

帝ふ追のらや触ん花のる

東福寺

無珍

あわくと人の影さけ月んか

月彦

月も今小まの情と知る歌

二ツ柳

金龍

浅きの曙見多里花結山

櫻芳

財をけハ老も若さも世の人

白馬

晴るも尚余ぬるらま益の月

五逸

春の志つむるあはし益の月

平交保

雪彦

人聲のありくとそん月ねか

八幡

秀月

見るとはつれは花の晴るを安んず 信内幣川 其 桃

梅も波さしと花をよみ入日 篠野井 雨 住

咲きと思ふ人もはれさき 篠野井 一 舞

花も田のうはれもさきある梅 中鉢僧 杏 鴉

雪水の雫をさるや秋の月 中鉢僧 卧 龍

新月やろさく人の寝 三ノ井 梅 子

夕多あそく人あはれし盃の月 三ノ井 午 堂

花も来客や今年の家 石渡 春 齋

十三

睡覚やひかきさきん小月の澄 駒次 道 齋

あさきの野も魚つらさる月の 駒次 義 石

花を起し身を花のま結うせさ 石村 澤 池

乳呑子もあそび月見 石村 青 山

月の山牙を物鳥のね明 石村 且 水

眠るより童子も花も 石村 甘 青

琴もさ枝もあそ 石村 和 嘉 月

名月や撐て撐 東茶 南 陵

七十小春を括る如月の秋 信石村 泉 齋

深る松の煙もほそはる月 吉田 自 耕

曇り中降ゆく月の面白き 此 硯 齋

月の友又月を友恋一秋さ 此 月

松風小背中押せん益結月 東茶 芝 曉

月小出く兼一や田を畑至 三平寺 惠 齋

桐の葉結表うけり夫益の月 南々 宗 二

名月や花乃咲歩次撰る 石村 鏡 齋

十四

月の芒人のちのさくさあるあり 南々 宗 泉

山更しく人あを更き益の月 石村 白 齋

花の霜宿りとのをメあり 湯田中 希 杖

花の雪野洞のるの房 善光寺 白 堂

名雪の花あはあさ山ささり 梯 居

多く更し秋のあおれ燈籠 兔 洲

見ふ人のあまき秋の月 長 莊

約束のあまき秋や益結月 上毛坂本 伯 芳



月々青松あり山も新く形家 上毛草 魚毛

春のしそ藤とやうあり月の香 看山

名月や張走少ありいづる庭 李城

藤堀や少く結山見ると月結中 久中岐

見るとあまく甲あるまや三方の月 上毛 青隠

芝咲て月も懸不見る秋小 新田 瑤林女史

入月の影照ふ都うきりくは 錦水女史

山結秋の別小ぬくや維子の唱 武州唐子 有臺

十又

時鳥聲も極や雪の中 江戸 三桂

月を捨る名所もほし盃の月 上毛 青峨

夕暮のそくしての喜結解小介 大坂 井眉

松風の志とや堅固小枯男塔 京 布雪

芥やきのまこ止るまぬ野梅分 榛堂

あさこ程松と目如度子日分 蒼虬

浅考のあさもほりは表の厂 栗津 夙也

月々青只白妙の野山く甫 イヨ 山月

月の芳臨天嘯かさまら利

江島山上

星屋

霞花小名の流の匂ハ一さ

信州出村

道生

茅の戸結枝豆小春月の影

鏡掛山

光

あり里や花よ人同の無縁寺

宿渡

一泉

名月の徳や玉あり軒の雨

五

艸

鐘もかもし中より暮を雲の上

尾高サキ

可布

行原もつ後とるもまのう

江戸

一具

本母ちの余冬の本さへ皆櫻

鶯笠

春首の遠りき月湖あり

護物

名月や至と思ふ本ハ心つき

以吉

本撞嘆や米搗言と伝ん

應く

耳小名をかきしそきぬ茶のる

蕉雨

何となく森とまぬお多利部河

大梅

下総と雪もれも影の月

素心

門松のある小垣と炎と影の影

確嶺

山もあふ月もあふる魂莫

小諸 知古

帰るさや月を跡しそ山の秋

雲溪

隔るあふを益跡月秋分

一齋

送るさや暮一秋を山の月

盲人 志明

更りり秋やあまき月の影

里遊

待うけさ月を夜更く山の秋

桃翠

山の端ふみあふく影を益跡月

箕山

送りさや消く今年も山の月

石女

更る秋や鳴子も落く月の澄 巴水

行とまをあふる跡亦や山の月 魯杏

あふるあふるは在居士の昔を語む  
回向小のなご家作善供養あふると  
わくの筆紙はるる

一茶居士

系とあやうき咲らん 苔の花

清水も時跡 管と那 牙 魯 恭

椽先小珠 穀一つけ 燈の二つ 来々 雉 啄

菱小あふる 棟上の 梅 恭

ころもをささげしと月も終も終  
 多鞋のひも小結ふ白髪  
 絆の子よつと紫苑の丘ひき  
 耳の笑ゆか肉ハ舌垂ひく  
 漣の志くともさうも都鳥  
 逢まぬがとと神楽さうか  
 学不安き人の三橋ををひ並  
 松葉の帯結流あ人ぬこ  
 啄 古 恭 啄 恭 啄 恭 啄

十八

目とさう小つぬあまき酒並人  
 鐘を鈴ふさあまきと冷海く  
 掌をあつさうとさう豆まか  
 晩の雪屋をさうふ内院  
 花の面版の葉ふも降出  
 水の上まき掃除さる喜  
 下畧  
 二夜三表見て月の一表か  
 確 嶺 啄 古 啄 古 啄 古

たらしむる夢の夢不程の種 鷹山  
藍濯く身元不秋の波よせく 半山  
あやむ先ふまふ客の襷立 易足  
さ志萱の統結延くま永く 鷹  
我ふよる似く雀子の来 半  
牙ふはらぬ刀指く於ぬ月小 易  
信ふはらぬ福宜の病借 鷹  
あさく各紙あさぬ意を多きと 半

十九

芥子の散日のありてまよき 易  
逆井を旅森の罍や見て歩行 鷹  
人も教へぬ経 戒 免 冢 半  
張るあき葉あきこ秋も月のる 易  
二軒窓合の唱子 白 鳴 鷹  
井市不才の智恵を皆借く 半  
看取喰ふ不吉娘比形を 易  
一本おせ茶や搦の囃かき 鷹

甚ふふあつぬ 糞塚の 奇半

膏色や 岩捨さの 草野々 蒿居

冬小まゐるより 月のさけ 家 白堂

極こうえと 柳覗けの 山とえと 長莊

大さう水紙 後ま 苗代 居

烏帽子多と 雲雀の 古巢 鷗歩引 堂

時の古 靴ハハッ 七川 莊

雑魚汁の心 ころ 待も さめぬ 居

按摩 多々 せき さいの 支羽 篇 堂

以ち早く 母の 具さ け 加帳 莊

袴の 勇 健 結 免ん 長 居

猪沼を 送る 舟 札紙 遠比 堂

猪のと 結 け 田 河 川 小 居

かき け 小 三 表 さ 結 月 も 拜 居

瘡ま 一 ち 著 結 漸 堂

物多うぬ妹氏 宮不 戸ととり  
松真の明りも多うぬははあさ  
一盛梅もはうぬ花のそお  
るの中とをを 砂 道  
莊 堂 居 莊

花の盛ゆ風を以て比月ハ  
隈あうらんこやをゆる温あま  
かたりて一衣の山終自せん下  
のなきあまはと備中

温あまを結んを助の部と所  
子持あう免を儲君子の玉輝を  
系物小あしと糖塚集の四編を  
はるも風聲の道不あはし今  
年此の秋あそ  
月を山乃さやまん以て秋は  
秋も蔭もさあ垣根 秋  
韻曳は著の色さめ  
確 曾 三  
嶺 恭 民

水より多むをせしむぬ早 節  
春より春のまゝなり 廿日 三  
代り来るやありる 以角 七  
寐記より 飯より 程亦用もあま  
は春より 名をい 忘 子あり  
西よりきたりつ まはく 節屋の口  
悉せぬより もあまぬ 友 獲  
至後の 体紙 山崩に 鳥羽 繩子

民 嶺 恭 民 嶺 恭 民 嶺 恭 民

一 度小物ハ 買をぬ 分別  
産をく 垣 結ふ 月の 取小入と  
鹿の 鳴まを 人を かくさぬ  
此 秋も 穽あまを 風 祭  
披 亦も せつ小 仕 穽 温泉 土産  
花の本小 無人く 中へ さま 仮の 名  
集も 四 編小 春の かさ 集る

嶺 恭 民 嶺 恭 民 嶺 恭 民 嶺 恭 民



催主温齋連中

高うりて物果ふくきふの月	湖
子の戸やさく傳る傳月一秋	椿
家傳小折麦子も益法月	寛
月をさ人傳る見ふ秋の會ふ	三
精靈のり来や月の入	知
花	明
氣まろせふ飛家かえり月秋ふ	魯
	山

止三

